

立命館大学大学院文学研究科

修士論文要旨

『万葉集』行幸歌生成論

——「女性讃美」と「恋」の歌をめぐる——

日本文学専攻 高塚 淑 恵

『万葉集』には舒明天皇から孝謙天皇の御代までの行幸歌が収載されている。その中の行幸歌は行幸時の宴において生成されたものと考えられ、万葉人にとって行幸における宴（天皇中心の肆宴、皇子中心の宴、官人中心の宴など）がいかに歌生成の基盤となっていたかが伺える。

これまでの行幸歌に関する先行研究においてはおおよそ「天皇・行幸讃美」の歌、「土地讃美」の歌、「家郷思慕」の歌、という三点が指摘され、「天皇・行幸讃美」の歌の典型として柿本人麻呂、笠金村、山部赤人といった「宮廷歌人」の離宮讃歌を指摘するものが多く、それらに関する議論は盛んにされてきた。しかし従来の研究において皆無ではないものほとんど指摘されることがなかったもので、しかし「天皇・行幸讃美」の歌として一つの類型をなすものに「女性讃美」の歌がある。そして前述の行幸歌の三点に指摘はされていないが、行幸歌に多く見出せるものに「恋」の歌がある。そこで修士論文では「女性讃美」の歌、「恋」の歌がそれぞれどのようなものであり、またそれらがどのように生成されるのかについて考察した。

まず第一章では行幸歌生成の場としての「宴」を先行研究を踏まえながら提示し、宮廷や貴族官人の邸宅における宴歌との比較を通して行幸宴歌の発想について考察した。そして行幸の宴においては、一般の宴が「宴の場」を祭祀空間とした歌の発想をとるのに対し、「行幸地」を祭祀空間とした歌の発想をとることを論じた。

第二章では具体的に「女性讃美」の歌として持統六年伊勢国行幸歌、神龜三年印南野行幸歌、「恋」の歌として神龜五年難波宮行幸歌を取り上げその表現を考察した。「女性讃美」の歌は宮廷奉仕者であるところの女官や海人娘子の神事に仕える姿を詠むことで讃美するものであり、「恋」の歌は従駕官人と土地の女性との恋を詠むものであるということを論じた。

第三章では第一章・第二章を踏まえつつ、宮廷や貴族官人の邸宅における宴の「女性讃美」と「恋」の歌をもとに行幸の宴において「女性讃美」と「恋」の歌がどのように生成されるのかについて考察した。行幸における「女性讃美」の歌は神事・宴の場における神女讃美の世界を基盤としながら、行幸地における神事に仕える姿として表現されることになると論じた。「恋」の歌については先行研究を踏まえつつ、宴の主客の交歓が来訪する男と待つ女の交歓に擬せられること（宴における人々の交歓が男女の逢会に擬せられること）があることを確認し、行幸の宴においては行幸地を来訪する官人と、待つ側の土地の女性との恋として表現されることになると論じた。

谷川俊太郎『旅』

——一九五〇・六〇年代の言葉への問題意識とその転換について

日本文学専攻 谷 口 慎 次

詩集『旅』は言葉を捕まえられない、「詩が書けない」ということが大きなテーマとなっている。しかし谷川自身は詩が書けないと感じた時期として一九六〇年前後をあげている。谷川がなぜ言葉を捉えられないと感じるようになったのか、そして『旅』はどういう意味を持った詩集だったのかを考察する。

谷川が言葉への不信に陥ったのは言葉と生活の関係からであった。彼は一九五〇年代の評論の中で言葉には伝達の面と「言葉を超えている、もっと大きな、もっと得体の知れない、もっと肉感的な、或る実体の感じ」を持った側面があると述べ、実際の生活で使われる言葉だけでなく、詩で使われる言葉でもこの「実体の感じ」が重要であると理解していた。しかし、詩作を生活の一部分と考えるようになったことで、言葉は「実体の感じ」を失い、意味だけのものとなってしまふ。このことが彼に言葉の信頼感を失わせてしまった。この言葉への不信は詩集『あなたに』で家庭への司式とその中での変化の気球、言葉よりも沈黙を求める意識として表されている。

その後の二冊の詩集『21』『落首九十九』では谷川はそれまでの詩風からの変化を目指し、さまざまな試みを行い、詩自体の形としては大きく変化すること成功する。しかし、これらの詩集で行われた試みも彼の言葉への不信を払拭することはできなかった。谷川は『落首九十九』と同時期の長編詩「ad lib. 23/1/63」で言葉の問題に再び挑戦するが、この詩集は問題を直視したこと以

上の成果を上げることができなかった。

『旅』ではソネット（十四行詩）という詩形と連作という方法で形式上での整理が行われ、「ad lib. 23/1/63」にあった冗長さや曖昧さがなくなった。そして三つの連作「鳥羽」「旅」「anonym」が進むにつれ問題が一つ一つ明確なものとなっていった。

「鳥羽」では「詩が書けない」ということがはっきりとかかれることによって問題が意識され、また視点が外部に向けられるようになった。『旅』では自らの欧米旅行の記憶をたどることで再び内部に目が向けられる。そしてそこで谷川は外部や内部からダイレクトにたち現れてくるものを感じ、そして言葉がそれを名づけようとすると言葉はその感覚と人を隔てるが、言葉が持つ実感を生かすとき、両者は結び付けられることを知る。

そして「anonym」において谷川は「書けないと／書かねばならない／／ここにしか精神はない」という言葉で言葉への信頼回復を宣言する。それは谷川が言葉を道具とみなした考えを変えさせ、言葉を自立したものと考えさせ、また沈黙と言葉は別のものではなく、沈黙は言葉の始まりであることと認識させた。こうした捉え直しによって、『旅』は特に一九七〇年代の様々な詩集を生み出すことを可能にした、大きな転換点となった。

竹中郁詩論

— そのモダニティと抒情性 —

日本文学専攻 福田(井上)知子

一般に竹中郁は「モダニズムの詩人」として評価されている。そして作風はモダニズムから、ロマンティシズムを経て、リアリズムへ変化したといわれている。しかし、はたしてそうなのか。生誕百年を迎える今年(二〇〇四年)、私は九冊の詩集から『象牙海岸』(モダニズム時代)、『署名』(ロマンティシズム時代)、『動物磁気』(リアリズム時代)をテキストに、それぞれ作品鑑賞を通して郁のポエジーの本質を見極めていくことで竹中郁の再評価を試みた。

●第一章

シネ・ポエムは一九二〇年代にフランスのシュールレアリストたちによって創始された詩形。日本では春山行夫編集の詩誌「詩と詩論」を中心とするレスプリ・ヌーボー(新詩精神)のうちに生まれ新しい実験として試みられた。中でも竹中郁の詩「ラグビー」は高い評価を受けている。当時と現在のシネ・ポエム評、同時代の作品を鑑賞・比較しながら郁のシネ・ポエムの斬新性を分析し、郁にとつてのシネ・ポエムを考察する。そこには、モニタージュヤクローズアップといったシネマの技法だけに終始しない視覚、聴覚、触覚、嗅覚におけるイメージの類ない鮮烈さがあり、天成の詩人ならではの言葉に対する感性の特質なきらめきがあった。また、ウィットと抒情で存在意識を言葉に形象化するという近代的手法は、フォルムに傾きがちな従来のモダニズムとは別個の新し

い可能性をもたらした。それは、郁のモダニズムの基層には独自の抒情性があったからに他ならない。

八四

●第二章

では、その独自の抒情性とは何か。私は郁の詩に「永遠に連結された芸術の美」をみる。郁の抒情は単なる「憂愁」ではなく、「知性」に彩られた抒情である。パリ留学先での自由な孤独のうちに、知性の苦悶としての詩作の苦闘を認識して、やがてそれは「永遠」に連結された言葉の美学を生み出していく。具体的に詩作品をあげて、シラーとカントの美学から分析し、一篇の詩が芸術として立ち上がる瞬間を試みる。

また、一般に郁の詩がモダニズムからロマンティシズムへと移行したのは詩誌「四季」の影響だとされているが、そうではなく本来あった資質をひらくきっかけになったにすぎないと分析する。さらに、『署名』は主に「四季」に発表された作品での構成詩集であるとされているが、当時の雑誌を丹念に調べていくと四十九篇のうちのたった三篇であったことも指摘しておきたい。

●第三章

『動物磁気』では詩風はリアリズムへと変化する。家が全焼した戦災体験を経て、簡潔・平明・人生的な社会批判の詩が登場する。なおも明るいヒューマンな目線、ユーモラスな家族風景が描かれる。一体「動物磁気」とは何であろう。一般に「生きるエネルギーのようなもの」と言われているが、私はここに、郁が「憑かれない心」(井上靖)で観た敗戦後の風景はメスメルの定義から考察して「催眠状態」に陥っているように見えたのではないかと分析した。そうして、郁の詩芸術はいのちをいとおしむ「生命の閃光」に充ちた「発見」の芸術ではないかと考える。生活の断片に落ちているもの、郁によって詩になると誰もが「ああ、私もそう感じていた」といったようなもの。郁はそうした生きて

いる人間への気持ちの添わせ方がベースとなっていて、ただ手法の差異が詩形の差異（モダニズム→ロマンティシズム→リアリズム）を生んだのではないか。だから〈まいったくのふだん〉から宝石を拾うように言葉をひろいあげる基層の詩精神は変わっていない。そして、杉浦明平の言葉を借りれば「星の運にめぐまれた稀有の僥倖」の詩人であった。

追記…今回、調べ切れなかったのは外国におけるシネ・ポエムの考察と、第二期「明星」（大正十三年七月）に郁のごく初期の作品が掲載されていたことから、フランス俳諧詩の運動の影響も多々あると推測できたが、これもまた調べきれなかったことが残念である。しかし、昨年の夏から現在さらに今春に向けての『竹中郁詩集成』（三月刊行予定・沖積社）への編集参加は、私にとって貴重な経験であった。何よりも詩そのものに何度も触れ、読み返して、考えることを基本とした。上記本には私が当時の雑誌を練るうちに発見した詩篇もいくつか追加されるのは嬉しい収穫でもあった。

王安石「萬言書」の背景

東洋思想専攻 佃 隆 志

本論は、卒論に引き続き、王安石の「萬言書」を研究の対象とした。そもそも「萬言書」は、王安石が後年行った新法と関連付けられ、いわば新法の青写真としての役割を「萬言書」から読み取るうとする視角から論じられることが多い。しかし、「萬言書」の記述は教育制度の革新を訴えることに主眼があり、新法期に実施された青苗法や募役法といった社会経済政策に関してほとんど具体的な提言はみられない。新法の雛型は彼の地方官時代の政策に見られることは従来から指摘されている。彼はなぜ鄞縣時代に見られるような実効的な政策ではなく、迂遠と考えられがちな教育改革を提言したのであろうか。

王安石が地方官として極めて有能であったことはよく知られているが、必ずしも成功ばかり収めていたわけではない。「萬言書」を書いた当時の彼は、常州の知事として行った治水事業に失敗してその地方に多大な被害を与えた。また、常州に引き続いて任ぜられた提點刑獄の職務においても胥吏の不正事件の摘発をめぐって非難にさらされていた。彼は、そのために周囲から非難を受け失意の淵にあった。

王安石が、心理的なショックを受けたのは、単に職務を順調に遂行することが出来なかったということよりも彼の親しい友人である曾鞏からも批判をうけたことであり、このことは彼の政治的な信念に対しても大きな動揺を与えた。彼は親しい友人王回との書簡を通しての議論の中で、自らの政治的理想を深く考察し、彼が理想とした古代へと回帰するためには『禮記』王制篇に典故があ

る「道徳を一にする」ことの必要性を認識する。その記述によると古代においては完備した教育制度が存在し、このため士人の道徳意識が統一されたことが述べられている。彼はこうした経験により教育制度の革新の必要性を痛感し「萬言書」でこれを展開することになったのである。

戦後歴史学における石母田史学の再検討

——その史学史的意義について——

史学専攻（日本史） 岡 田 俊 洋

戦後の歴史学研究を主導してきたのは、マルクス主義歴史学であった。しかし、一九八〇年代以降、冷戦構造の崩壊とともにその理論が説得力を喪失した。その影響は歴史学研究においても見られる。その一つは歴史における理論の弱さであり、今ひとつは諸学問間の「共通語」の欠如である。歴史学においては、これまでマルクス主義が担ってきたこれらの要素が失われたことにより、歴史学研究は個別細分化の傾向が進み、全体性を語る力を喪失しつつある。

このような情況のもと、数年前に日本史研究会において「戦後歴史学の総括」というテーマが提起された。では、「戦後歴史学の総括」とはどのようなことなのか。それは当然、戦後歴史学において、少なくともある時期まではヘゲモニーを握ってきた、マルクス主義歴史学の総括が中心になろう。

本稿は、石母田正の歴史学をその標章として、戦後マルクス主義歴史学の問題意識とその経験・成果を再検討する試みである。

第一章では、戦前のマルクス主義歴史学とその内部における石母田の活動を追うとともに、戦時下に執筆され、戦後一九四六年に公刊された『中世的世界の形成』について考察する。

『中世的世界の形成』に見られる特徴は、以下の二点である。一つは、東大寺を天皇制、荘民を戦時下の日本人、黒田悪党を知識人の、それぞれメタファとして、黒田荘という一つの荘園における中世の古代への敗北を執拗に描く。

それは、戦前の日本において知識人が民衆から孤立・乖離したことにより、フアシズムに敗北したことを同時に描いているという点である。石母田のこの問題意識は、一九五〇年代に行われる国民的歴史学運動につながってゆく。

もう一点は、「世界史の基本法則」への信頼である。一荘園の歴史が普遍性を持ち、かつそこには生産関係と階級闘争により、古代↓中世↓近代という歴史発展の法則が貫徹しているという考え方のもとに同書が書かれているという点である。

この「世界史の基本法則」は、日本の歴史がある普遍的な法則に基づき、歴史学が科学的学問として成立することを論証することにより、戦前的な、日本を特殊な「万邦無比」の国とする皇国史観を批判した。このことによりマルクス主義歴史学は戦後歴史学の出発点において広汎な支持を得ることになったのである。そして戦前からのマルクス主義者であった石母田は、その指導的立場に立った。

第二章では、石母田の国民的歴史学運動との関わりについて考察する。

一九五〇年代前半から、民科歴史学部会によって推進されたこの運動は、知識人である歴史学者と民衆との連帯を直接に求めた実践活動であった。若手の研究者や学生が実際に工場・農村に入行って、読書会・研究会や、劇・紙芝居を行ない、それを通じて民衆が自分で自分たちの歴史を書くようになることを目指した。また、そのような活動により知識人の側の啓蒙主義的意識を革新することも、大きな目的とされた。この運動において最大の影響力を持ったのが、『(正) 続 歴史と民族の発見』であった。これは歴史学に対する姿勢や、当時の実際的な問題についての考えを書いた小稿を集成したものであり、運動のバイブル的存在となった。

このような運動が行なわれた背景には、当時のいわゆる「逆コース」の状況があった。レッドパージや旧戦犯の釈放、安保条約によるアメリカ軍の駐留などは、アメリカによる日本の植民地化と認識され「民族の危機」が喧伝された。

また、中華人民共和国の成立・朝鮮戦争などの東アジアの変動とも相まって、歴史学界では従来の「世界史の基本法則」とアジア停滞性論に対する疑問が生まれ、当時の歴史学界では「民族の問題」が中心的な課題となっていたのである。国民的歴史学運動は、労働者・農民の「民族」として、歴史の主体としての自覚を促すという目的を持つものでもあった。

しかし、このような「民族」の強調にはマルクス主義歴史学内部からも疑問が出ていた。民族(ナチツィヤ)が近代資本主義によって私立するというマルクス主義の原則は共有されていたが、前近代におけるその萌芽としてのナロードノスチの重視は、戦前の民族主義につながりかねないという批判が、主に近代史学者から寄せられ、歴史学界は混乱を免れなかった。

国民的歴史学運動は一九五〇年代前半には挫折するのであるが、その原因として本質的かつ最大の要素が、この「民族」についての認識の曖昧さと混乱であった。

運動の挫折によって、指導的立場にあった石母田は自己批判を行なったが、史的唯物論の不徹底・実証主義批判の誤り・日本の情勢判断の誤り・運動の啓蒙主義的傾向・民衆の多様性についての認識不足について言及されたに留まった。しかし、石母田はこれ以降模索を続け、それを歴史学研究に反映させていく。

第三章では、一九五〇年代半ば以降の石母田の歴史学研究について、権門体制論との比較を行ないつつ考察する。

石母田は一九五六年に『古代末期政治史序説』を上梓する。これは一九五〇年に書かれた「古代末期の政治過程および政治形態」を本文とし、その前後に書かれたいくつかの小稿を「補遺」としたものである。扱われるのは、十世紀から十二世紀後半にかけてであり、古代末期の動乱と、院政・平氏政権及び鎌倉幕府の生産関係的・階級闘争的特徴を分析している。

特徴としては、日本と西欧の古代から中世への移行を比較史的に検討し、日

本が院政という独自の過渡期を持ったこと、それが「世界史の基本法則」に（異民族の介入という要素を持った西欧よりも）忠実であるとした点が挙げられる。ここに「世界史の基本法則」という普遍性と、日本史の特殊性・具体性を関係付けようとする模索の萌芽が認められるが、石母田は在地領主層の内的発展による中世封建制の確立という点では動かなかった。

このような中世史観を領主制（理）論というが、中世史学者の黒田俊雄はこれを批判して権門体制論を提起した。一九六〇年代の日本は、安保改定の後に高度経済成長に向かう。黒田は、こうした日本の状況下において領主制論は、日本と西欧の類似性を指摘することで日本のアメリカ帝国主義への追従を批判するどころか、補強しかねないとし、日本の中世史像に転換を迫った。

また一九六〇年代には他にも、新たな歴史像を提起しようと、人民闘争研究や、日本史における国際的契機の重視（例えば芝原拓自らによる明治維新研究）などが盛んになった。

石母田は一九五九年頃からやはり国際的契機と帝国主義についての関心を強め、古代日本を「東夷の小帝国」と位置付けた。一九六〇年代には、校務や留学で論文の数こそ減少するが、この時期は一九七一年の『日本の古代国家』に結実する模索の期間であったと言える。

『日本の古代国家』は石母田の体系的著作としては最後のものである。同書は、第一章で「国家成立史における国際的契機」について述べつつもそれはあくまで契機に過ぎないとし、日本における古代国家の成立を、在地領主層（国造）を国家が取り込んでゆく過程として描いている。こうした見方については、山尾幸久などが詳細な批判を行なっている。

本書は、先の課題に対し、国際関係を契機として持ち込むことで乗り越えようとした石母田の試みであると言ってよい。

石母田史学の意義としては、まず現実的諸問題と積極的に関わったことが挙げられる。それは、歴史学の理論―それはマルクス主義に則ったものであった

が―を常に、現実の中において鍛えていったという研究姿勢ともつながるものである。そして、それゆえに石母田は戦後歴史学の様々な経験と深く「付き合う」ことになった。

第二に、領主制論へのこだわりである。これは、歴史変革の主体としての在地領主層の重視と同じく、自分自身を歴史変革における民衆の前衛としての立場に置き続けたことを意味する。

「戦後歴史学の総括」における石母田史学の重要性は以上のことから明白であると言える。

戦後沖繩における復帰運動について

——沖繩教職員会を中心に——

史学専攻（日本史） 櫻 澤 誠

本論文では、戦後沖繩の復帰運動およびそこから波及する諸運動について、沖繩教職員会の構造と変容を中心に検討を行った。その際に、①教職員会全体の強い結束力を前提とせず、特に屋良朝苗会長を相対的に位置付けること、②一九五〇年代は戦後直後に就職した「青年教員」、一九六〇年代は新制大学卒の「青年教員」に注目すること、③一九五〇年代からの復帰運動における教職員会の位置付け、及び、一九六八年の革新共闘会議、屋良主席誕生に至る、教職員会の政治（党）的側面を政党との関係の中で位置付けること、以上三点を重視した。

第一章では、まず屋良が群馬政府文教部長として校長層との間で復帰の意思統一を図り、求心力を高めるなかで教職員会会長として迎えられた経緯、及び、初期教職員会の文教局との協調関係を明示した。一九五〇年代前半の教職員会を軸とした初期復帰運動は、教育環境改善と密接に結びついており、その戦略は反共親米、基地・安保容認の姿勢を示しつつ施政権返還を求めたものであった。初期復帰運動のもう一つの軸であった青年会の中核もまた教員であったが、単純に教職員会の復帰志向を戦前教員の民族主義と結び付けるのではなく、当時、三分の二以上を占めた戦後教員を注視し、各地区レベルの復帰運動に表れる地域権力構造を、教職員会と青年会との関係性のなかで分析する必要があることを指摘した。また、教職員会による土地闘争、教育四法制定運動への取り組みについて検討し、特に、教育四法制定が文教局との対立への分岐点になったことを示した。

第二章では、まず一九六〇年四月の復帰協結成へと至る、運動の再組織化について考察した上で、復帰協結成が保革対立の重要な分岐点であったことを、一九六一年一二月の那覇市長選における革新三党共闘成立を例示して明らかにした。初期復帰協の方針は、基地問題を避けて焦点を復帰に絞り、多様な加盟団体の団結を保持するという復帰優先論であった。また、復帰協の軸は教職員会や労組などであり、政党ではなかった。屋良が主導する教職員会は、佐藤首相訪沖、教育権分離返還構想に対して、革新三党などが反対する中で、積極的に歓迎・賛成を行うなど、一層柔軟な姿勢を示す。だが、こうした路線は次第に「青年教員」の急増、台頭によって困難となる。時には現執行部批判をもちとわなない「青年教員」を軸に組合移行が推進され、ひとまず一九六七年七月の高教組結成に結実するが、こうした動向は、屋良路線の裏で着実に進展した、教職員会の革新化過程であったことを指摘した。

第三章では、まず教公二法阻止闘争における教職員会の十割年休行使決定が、屋良の反対を押し切って行われており、組織ヘゲモニーの転換点であったことを指摘した。以後、教職員会は、反保守、基地撤去の態度を鮮明化し、同時に復帰協も急進化していく。一九六八年一月の三大選挙で、屋良は革新統一候補として主席への当選を果たすが、直後に起きた二・四ゼネスト問題において、屋良主席の回避要請に対して、教職員会がゼネスト決行推進を決定したことは、両者の亀裂を決定的に示している。こうした亀裂は、屋良行政府と革新勢力との亀裂ともなり、その臨界点で起きたのが一九七一年八月の屋良新体制発足であり、革新勢力との関係が密な体制へと再構築されることになる。また、各加盟団体の本土との系列化が進み、復帰協内の結束力が弱体化していく中で、教職員会は復帰措置および復帰後の教育政策との闘いを前に、一九七一年九月に沖繩県教職員組合へと改組する。即ち、二つに分岐した、屋良行政府と教職員会は、どちらも復帰後へ向けて体制を変革させ、新たな時代を迎えたのである。

鍋底から覗く中世食生活

— 京都と草戸千軒町遺跡を例に —

史学専攻（日本史） 松島真弓

中世は現代に通じる和食の形成期であり、煮炊具においては土製品から鉄製品への移行期でもある。鉄製品を模したと思われる土製鍋・釜の出土状況には地域差がみられるが、鉄製品の遺存度の低さもあって、鉄製品―土製品や鍋―釜の補完関係や使い分けなど詳細は不明である。本研究は土製煮炊具の形態・容量・使用痕など使用属性からその具体的使用の復原を試み、その背後に鉄製品の普及状況を探るものである。

対象地域のうち草戸千軒町遺跡は、土師質鍋主体地域であり、特に四ツッ以上の大容量は在地産土師質鍋と少量の安芸産瓦質釜で占め、二ツッ前後の小容量では石鍋や畿内産瓦質鍋など土師質鍋以外の器種が目立つ。スス・おこげ・よごれ・ふきこぼれ・剥離・磨耗などの煮炊使用痕のうち、内面のよごれやおこげの位置や形状は多様であり、内面に使用痕がない場合も口縁にふきこぼれ痕が残る資料が多く、これらの用途は単なる湯沸しではない。特に、煮炊実験の成果を踏まえ、高い喫水線・ふきこぼれ・おこげの穀物粒状剥離を炊飯の使用痕と見なすならば、明確な炊飯痕をもつ資料は十五世紀中葉以前のものに限られ、その多くは麦飯であったと思われる。土製品から鉄製品への移行は、より耐熱性を必要とする竈使用や炊飯用のものから進行し、短時間や弱火加熱の副食や汁物調理には土製品が永く使用され続けたと想定される。

一方、京都は、瓦質の鍋・釜併用地域であり、古代の煮炊具の主体をなして

九〇

いた甕型の土師器・黒色土器が十世紀後半から減少し、空白期を是さんで十二世紀に瓦質鍋・釜が出現する。瓦質煮炊具は古代の土製品に比べ少量で、鍋・釜共に体部の形状はほぼ等しく、二ツ五ツが主である。鍋と釜に形状差が生じ始める十四〜十五世紀前半では鍋が主、十五世紀後半では羽釜が主となる。内面の使用痕が不明な破片資料が多いなかで、明確な炊飯痕をもつ資料が十五世紀後半の瓦質釜に集中し、白米より麦粒のほうが明瞭（粟類は洗浄による磨耗と識別困難）であることはこの時期の主な使用者が下層民であることを物語っている。瓦質製品（瓦器）の安価な上物写しという性格からすれば、出現期には儀器的役割の強かった瓦質鍋・釜が、新たに都に流入した下層民にとっての日用品となったのであろう。鍋・釜の違いは調理法の違いだけでなく使用者の出身地域と関連する可能性も考えられる。

以上のことから、調理方法が多様化し、大小様々な煮炊具を所有し、同じ釜の飯を食う（共食）単位も家族のみに限定されない中世においては、大容量の炊飯、小容量のおかず調理という図式はあてはまらない。また、多様な使用痕からすれば、土製煮炊具の役割は儀器だけに止まらず、階層によっては日用品であり、その調理法もまた多様であったといえる。

近隣型商店街における顧客維持戦略

——周辺地域住民のロイヤルティと地域への愛着に着目して——

地理学専攻 井原 淳

現在、商店街は、個々の店舗の努力ややる気があるかないか、といったレベルを超えてまるごと立ち行かなくなっている。特に、近隣型商店街は、年々とその厳しさがひどくなっていく一方である。しかし、大型店などでは充足されない消費者へのきめ細かな対応や、地域文化・社会の担い手としての役割など、商店街が果たしている役割は大きい。そこで本研究では、商店街活性化と地域社会の担い手としての役割などを含めて考察するために、商店街の顧客維持戦略と、地域への愛着 (Sense-of-place) に着目した。主に、(1) 質問紙調査より重要な顧客層を明らかにし、その顧客層の地理的分布から商店街活性化の地域的成功要因について検討する。(2) さらに、地域への愛着が顧客維持戦略に、影響を及ぼすのかどうか検討した。

対象地域としてICカードなどの最先端の情報機器を導入し、「地域に根ざした商店街」として全国の商店街から注目されている西新道錦会商店街を選定した。その後、同じ近隣型商店街でかつ西新道錦会商店街と同程度の規模で、商店街活性化の取り組みを行っている商店街として、松原京極商店街を選定した。質問紙調査より、顧客維持戦略の重要な概念である「関係性」と「ロイヤルティ」を用いて優良顧客群を明らかにした。その結果、両商店街ともに高年齢・高齢者層などが商店街にとって優良顧客群であった。優良顧客群の空間的な分布を、国勢調査小地域集計を用いて見てみると、西新道錦会商店街五〇〇m

圏のほうが松原京極商店街五〇〇m圏に比べ、望ましい消費者の空間的分布をしていた。調査の結果、商店街経営は消費者の空間的な分布に強く影響されることが判明した。しかし、これでは商店街の未来は明るくない。商店街は、どのようにすればこの消費者の空間的な分布を克服できるのかを考える必要がある。本研究では、場所のセンス(地域への愛着)が商店街の顧客維持戦略と空間的によろしく関係しているかということに着目した。地域への愛着は、人々が地域と積極的に関わることで高まる。本研究の結果、商店街の優良な顧客群に属さない人であったとしても、商店街に良い影響を与える地域への愛着が高い人であれば商店街と関係を持つことが解った。西新道錦会商店街は、様々な取り組みによる周辺地域住民との関係が、優良な顧客群に属さない人に対しても高いロイヤルティを生み出し、幅広い層と関係をもつことができたのである。西新道錦会商店街が、「地域に根ざした商店街」として全国の商店街から注目されている理由はここにある。近隣型商店街が今後も商業活動を行っていくためには、周辺地域住民との太いパイプが重要な鍵となる。周辺地域住民との太いパイプが、顧客維持を行っていく上で欠かせない。

本研究では、(1) 顧客維持戦略の重要な概念である「関係性」を用いて商店街の重要顧客層や商店街と関係をもたない人の属性を明らかにし、(2) 商店街に対する消費者の分布をみることによってその地域的成功要因を明らかにした。さらに、(3) 商店街と関係をもたない人でも、商店街に好影響を与える地域への愛着が高い人であれば商店街と関係を持つようになること、以上三点を明らかにすることができた。

都市近郊における子どもの「居場所」と

生活空間の成立条件

——奈良市立平城中学校を事例に——

地理学専攻 川野 敬

【研究目的】

近年、子ども観および子どもを取り巻く状況が多様化するなかで、地域における子どもの日常生活空間の展開が遊び行動のみでは説明できなくなっている。そこで本稿では子どもの行動を日常生活全体から把握するために居場所という概念を用いて、子どもの生活空間とその成立条件を明らかにすることを目的とした。そのために、子どもが学校や家庭と比較して地域をどのように位置づけをしているのか明らかにし、地理的条件だけでなく時間的条件、友人や保護者、学校、近隣住民といった子どもの身近に存在する他者との関係性から生じる社会的条件にも着目した。

【研究方法】

奈良市立平城中学校に所属する一～三年生の生徒およびその保護者に対するアンケート調査と略地図への記入によって、子どもの日常生活範囲と居場所の展開を利用時間や同伴相手とともに回答を求め、生活空間を利用頻度によって日常的・非日常生活空間に区別して分析をすすめた。

【結果と考察】

まず、子どもにとって地域は学校や家庭より関係性が希薄であり、関心もそれほど高くないことが分かった。反対に学校との関係性は非常に密であり、日

常的生活空間では子どもは学校と自宅を軸として日常生活範囲を形成している。一方で、休日や帰宅後の活動によっても準日常生活範囲とも言える居場所が商業施設や友人宅、習い事先、広場・グラウンドで形成されており、それは時間・仲間といった条件によって中学校区内を中心として多様な形態をとることが分かった。

日常生活空間外については友人との同伴行動によってその活動範囲が拡大されるが、距離の離れた大都市部になると急速にその行動経験は減少することが分かった。なお、女子は単独行動よりも友人同伴行動の方を好む傾向があり、友人同伴であれば男子より行動範囲が拡大する傾向がみられた。

日常生活空間内での子どもの生活行動に対する認識は、子どもと保護者の間で一致しており、子ども自身も規制されているという意識は薄い。しかし、個々の家庭ないし属性によって対応させていくと保護者は正確に子どもの行動を捉えてはいない。これは保護者が子どもとの会話だけで生活行動を想定しているのではなく、その他の情報から保護者全体に共通する行動基準を形成しているためであると考えられる。そして、この行動基準は日常生活範囲外など距離が離れていくほど、子ども自身の行動にも適用されるようになることが分かった。

空間的マイクロシミュレーションモデルを用いた

消費者購買行動分析

——滋賀県草津市を事例に——

地理学専攻 花岡 和 聖

【研究背景・目的】近年、消費者欲求の多様化、市場の量的・心理的飽和、企業間競争の激化といった諸要因を背景として、市場の細分化が進んでいる。このような市場の変化に対応するために、多様な消費者属性の詳細な購買行動に関するマイクロデータ分析の必要性が生じている。しかし、POSデータやアンケート調査によって得られるマイクロデータには、標本バイアス、空間スケールの欠如、分析に必要な変数の欠如といった問題がある。こうしたマイクロデータ利用の問題は、多様なデータソースを結合し、詳細なマイクロデータを推計・分析するマイクロシミュレーションモデル(MSM)、とりわけ空間的属性を考慮した空間的MSMによって克服できる。そこで、本研究では空間的MSMによってミクロな消費者購買行動の推計・分析を行うための手法を提案し、その有効性を検証する。

【研究方法】立命館大学地理学教室と草津市商工会議所によって実施された二〇〇一年度消費者購買行動調査(以下、購買行動調査)の生鮮食料品に関するデータを用い、草津市の詳細な購買行動分析のための空間的MSMの方法論を検討した。

この空間的MSMの構築手順は、次の通りである。(1)購買行動調査より草

津市の全世帯の合成マイクロデータを、組合せ最適化アルゴリズムのSynthetic reconstruction法を用いて、国勢調査とが整合するように作成、(2)店舗選択や交通手段選択の条件付き確率を世帯属性ごとに求め、モンテカルロ・サンプリングにより購買行動の変数を追加、(3)家計調査から世帯ごとの生鮮食料品に対する消費支出額を推計、(4)推計されたマイクロデータを集計し、店舗別の売上高の推計や消費者購買行動の差異について検討した。

【結果・考察】空間的MSMによる合成マイクロデータに基づいた、店舗選択や交通手段選択からは、JR線によるバリアー効果など、実態に即した消費者購買行動の空間構造が推計されている。また、平均支出額や店舗売上高についても、推計値の範囲や空間分布において、現実的な値を示している。さらに、三店舗の具体事例を通して、店舗別の世帯属性、消費支出額、交通手段などの違いについても把握できた。

空間的MSMを消費者購買行動分析に用いる利点として、次の二点を指摘できる。第一に、標本誤差や空間スケールの問題を解消し、マイクロデータの多角的な集計・分析を可能とする。第二に、消費者購買行動調査のデータに、様々な統計資料に基づいて新たな情報を付加できるため、調査データおよび統計資料の限界を克服できる。こうした特性に基づいて、空間的MSMは市場の細分化に対応した購買行動の推計や分析を可能とし、エリア・マーケティングを実施する上で有用な情報を提供できる。

外来石工の受容にみる村落社会の比較検討

— 高度経済成長期を中心とした三つの島嶼部における石採工を事例に —

地理学専攻 山野 祥子

石材は古来より、建築・土木をはじめとして、日常生活の様々な場面で用いられ、その生業や産業は極めて重要な位置を占めてきた。しかし、これまでわずかながら見られる石材業に関する研究は、個別石材産地における盛衰状況の報告がほとんどであった。また、石工についてもその技能や道具に着目した民俗学的なものや美術史的な研究に限られており、彼ら自体に焦点が当てられることはほとんどなかった。彼らの多くは石材の産地を転々と移動する出稼石工であり、その足跡にのみ目が向けられてきたのである。しかしながら、長期的にその動きを見ていくと、労働先に居住し続ける例も存在する。外来者として村落に入り、住居を構えてその地で労働に従事し、世帯を持つ外来石工も少なくない。そして、彼らを中心として村落に石材業が展開された。そこで本研究では、外来石工と彼らを受容する村落社会とに着目し、両者の関係について明らかにすることを目的とする。研究対象地域には①外来石工が村民に雇用された滋賀県近江八幡市沖島、②村民から借地し、外来石工自らが経営に従事した岡山県笠岡市北木島、③村有地を借地し、外来石工が経営に従事した笠岡市白石島、の三つの島嶼部を選定した。また、国内の石材業が最盛期であった高度経済成長期を中心とした記録類と、聞き取りによって調査を行なった。

結果、それぞれの村落では外来石工の受け入れ方に相違が見られた。沖島では、外来石工は雇用される立場であったために、島民との関わりを特に持つこ

とがなかった。そのため彼らは村落の縁辺部に居住し、島民と婚姻関係を結ぶことがなく、村落の共有財産や漁業権に関わることもできなかった。一方、北木島の外来石工は経営者として島民を雇用しただけでなく、採掘された石材は島民によって加工・出荷された。加えて、島民に借地料を支払い、島内に施設などを建設することで利益を還元していたのである。そのため村落社会に受容され、島民と変わらない生活を送ってきた。白石島の外来石工も北木島と同様に自ら経営を行っていたが、彼らの採掘は小規模であったために、島民を雇用するまでには至らなかった。また、外来石工からの借地料は村の財産区管理会に支払われ、道路の建設費などに充当されていたが、その事実を島民は知らなかった。加えて、採掘された石材は隣の北木島で加工されていたために、島民が石材業に関わることがほとんどなかった。そのため、島内に利益を還元することのなかった白石島の外来石工は、村落社会から排除されていた。

外来石工が村落社会から受容されるには、村落への利益の還元が必要であることが明らかとなった。そして、彼らがその条件を満たすためには、自らが経営者となるだけでなく、地域住民を石材業のなかに組み込むことのできる規模の大きさも必要であることが推測できた。

トルコ・アンカラ市における不良住宅地区の地域的差異

——中心地区と郊外地区の比較を通して——

地理学専攻 横井英和

発展途上国の大都市に存在する不良住宅地区を対象とする研究は数多く見られるが、イスラム教諸国を取り扱った研究はあまり行われてこなかった。また、不良住宅地区住民の生活をイスラム教との関わりにおいて考察した研究もほとんど見られない。二〇〇一年の米同時多発テロなどを契機にイスラム教についての関心が世界的に高まる中、イスラム教国においてその住民がどのようにイスラム教と関わって暮らしているのか、という実態を明らかにすることは重要である。本稿ではイスラム教国の中でも早くから西洋的要素を取り入れ、経済的發展を遂げたトルコを取り上げ、特にかつては不法占拠集落地区住民が人口の七割を占めるほどであったアンカラ市を調査し、住民とイスラム教との関係性を検討した。

現在、アンカラ市の不法占拠集落地区は一九八四年の「建設物特赦法」により不法ではなくなっているが、実際には不良住宅地区を総称する「ゲジエコンドウ地区」という俗語で、明らかに他地区と区別されている。本稿ではこのような地区をその成立時期・都心部からの距離によって二種に分類し、それぞれの典型的地区でアンケート調査を行ったほか、統計資料を用いて分析した。

最近の国会議員総選挙（比例代表制）における地区ごとの政党別得票率を分析すると、都心部に近く、約五〇年ほど前に集落が成立した比較的古い不良住宅地区ではイスラム教主義を掲げる政党の得票率がそれほど高くなかったのに対

し、約三〇年ほど前に成立した郊外に立地する比較的新しい不良住宅地区ではその得票率が非常に高かった。しかし、同地区で行ったアンケート調査によれば、礼拝や断食などのイスラム教の義務や信仰心に関する質問事項すべての分析において、都心部に近い古い地区のほうが信仰心が高いという結果が得られた。比較によって明らかになった投票行動と信仰心の矛盾は、トルコのイスラム教主義政党が選挙区への社会的サービスに熱心であるという事実から説明できる。長い時間をかけて都市基盤が整った古い不良住宅地区の住民はもはや政党によるサービスを必要としないのに対し、郊外の住民は信仰心に関係なく、サービスを求めてイスラム教主義政党に投票していると考えられる。これはアンケートにおいて郊外地区住民が都心近接地区住民よりも所得が低いという結果が得られたことから説明がつく。

以上のようにイスラム教国の不良住宅地区住民はその信仰心よりもまず生活改善を重視していることなど、彼らの生活とイスラム教との関係性の一面が明らかになったと考える。

石牟礼道子試論

『苦海浄土』（一九六九）における〈転生の原理〉

いのちの取り戻しと、その解き放ちについて

インスティテュート専攻（言語と表象） 寺 下 浩 徳

本論文は、石牟礼道子（一九二七～）による水俣病者の生命と生活を描いた作品『苦海浄土―わが水俣病』（一九六九）に関する論考である。（以下『苦海浄土』と略す）

この『苦海浄土』の解釈に際して、本論では二つの目的を設定している。一つは、この作品に対する「近代・反公害」の読みを解き放つために、作中の多様な文学技法を読み直すことである。そして、次に本作品が投げかける現在の、かつ普遍的な問題を捉えなおすことである。それは、水俣病者の語りを水俣病の「出来事」を証かす言葉として、それ以上にそのものたちが生きていくための言葉として受けとめる「証言」の問題である。そのうえで、「証言」をめぐって水俣病者と作中登場人物「わたくし」のあいだで結ばれる双方向的な関係のありかたも指す。

具体的に第一章では、本作品発表後三十数年の歴史化の作業を見るために、発表当時の読まれ方を考え、その間の先行研究に対する批判的な解釈を試みる。そのなかで、この作品の執筆過程そのものが、水俣病者を否認する者たちに対する戦いであったことを読み取る。他方、「主語」の問題を見ることで、石牟礼自身が自己批判によって市民（われわれ）から訣別し、自分自身の視点を取り戻したことを指摘する。だがその取り戻した自分の視点も、水俣病者とのふれ

あいのなかでまた変化していくのである。

次に第二章では、『苦海浄土』における文学技法をみていく。本作品における「擬人法」の使用、『苦海浄土』にある演劇的な構成、そしてさまざまな「文体」の配列にどのような意図が存在していたのかをここでは明らかにしていく。それらは、生命を選別する思想や支配への抵抗だったことを意味する。

第三章では、視点を対人関係論にうつす。本作品においては、「わたくし」が水俣病者をいたわり、一方で水俣病者も「わたくし」をもてなす双方向的な関係が存在していた。その相互性のつながりをここでは論証する。

第四章では、水俣病者の「証言」の問題を扱う。石牟礼は、声すらもが奪われた語りえぬ証人から、文学の営みのなかで「証言」を聞き取る。また否認され、聴き届けられることのなかった無数の声・痕跡、またはその歌声にみられる水俣病者の想いを、石牟礼は書き取ることなくみ取っていくのである。

これらの論証を踏まえて、水俣病者の奪われてきた「いのち」を取り戻し、そしてその取り戻した「いのち」をも解き放つような、「転生」に寄り添う石牟礼道子の文学を考える。それは「水俣病」を関係の病として捉えなおすことで、それを自分の内側にも見てとり、同時に市民社会が抱える「水俣病」を描いたものになっている。